

統

法財人團

統一團發行

次 目

法 悅 と 願 行 (完結).....	本 多 日 生
立正安國論講話(第一講).....	小 林 一 郎
本佛實在の宗教哲學(二十五).....	河 合 陟 明
優婆塞戒經要解(其十).....	本 多 日 生
記 事	
○本部團報	
○福島教信	
○入帳報告	

號 月 七 年 八 十 四 第

統 一

第三編 郵便物認可
昭和十八年五月二十七日 第一日發行
昭和十八年六月一日發行

第五百七十九號

第四十八年 六月號

昭和十八年七月一日發行
昭和十八年七月一日發行
第五百八十號

第四十八年

第七六號

財團 法人統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經
過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ
外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク
萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對
應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向
上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ
決シテ他ノ追随ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母
體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出
セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會
アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ
又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ
炎メタル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ
與ヘタルヲ見シ 又著述出版ニ於テハ
大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精
要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ヲ超
エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行
シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法勳

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者
本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進
ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ
將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セン
ト欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第
二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮
スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起
スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シ
テ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日
蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲
ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一
ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ
教旨ノ正明 研學ノ淵遠 活動ノ旺盛
此等ハ統一團ノ標語ナリ

定ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文
化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永
久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ
最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ
同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法
爲國爲一切衆生切に懇望スル所ナリ

本團 畧則

- 目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ闡明シ
テ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文
化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ
培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ
理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ
教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」
ヲ發行ス
- 維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參
百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セ
ラル、方ヲ維持員トス
- 贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五
圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- 正團員 一時金拾圓以上又ハ毎年金
貳圓五拾錢ヲ繳納セラルル方ヲ正團員
トス
- 入團 御希望ノ方ハ住所氏名ヲ明記シ
適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ
無料ニテ頒布ス
- 勸友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ勸友トス

法悦と願行

(完結)

本多 日生

そこで法華經の方について之を考へて見ると、やはりこの法を護るといふことが一番大事なことになつて居つて、法華經の法師品第十の所に、法華經を一人のために話をしても、それが廣大無邊の功德であつて、『穢かに一人の爲めに法を説くも、當に是の人は如來の使である』佛様のお仕事にお手傳ひ申上げて居ることになるのであるからして、法華經を修行するといふことは、ただ自分の信仰だけでなく、その信じた氣分を人に分ち與へて行くといふことになつてこそ、その功德は益々廣大になつて行くのである。といふことから寶塔品に於ても、三度佛様は、『誰でもこの法華經を弘めようといふ精神があるならば、それを説け』といふことを仰言つた。そして夫の方に、惡人成佛、女人成佛を説かれたのも、ただ女人が救はれるといはれたのではない。『法華を弘めれば、どんな惡人でも救はれ、女人も助かる、それ程利きのよい教へであるから、一つ之を弘めて見たらどうぢや』といつて、自分が助かり、そして如何なる者でも助け得るものであるから、汝は法華に味方をせよ、といふ精神から女人成佛を説かれて居るのである。この意味合を考へなければならぬ。自分だけ救はれればもうそれでよいといふ、さういふ個人的になつたのでは、それは大乘の教へでない。『あなたが救はれる、無論私は救はれる。』斯ういふ結構な願に於て、女人成佛といふことがまことに明らかになつて居る譯であります。それによつて一人のためにもこの教へを説き傳へる、そこに廣大無邊な教への功德が成就するのである。然うさへすれば、佛もお喜びになるに相違ないし、功德もそこに現はれて來るのでありま

す。であるからして成佛するといふことを、ただ佛を信する佛にまかせるといふことは、それでもいいけれども、それで済してゐてはならぬ、それから出てその佛の仕事をお手傳ひするといふことに至つて、ここに成佛が間違ひなく決定するのであります。それから第二涅槃經に至つて、法華經の精神をまた繰返したところに、『護法の功徳を以つてこの金剛身を得た』と説かれ、今新様に佛になつて居るのは、法を護つてその力によつて得たと仰つた。

それで日蓮聖人の教へが他の宗旨と違ふのは、たとひ如何なる人でも護法の精神、法を護るの精神に生きたといふところに特色がある。日本人が他の國の人と異なるのは、如何なる場合にも國を守り君を守る、大和魂、忠君愛國、その精神に特色がある。法華經信者は、他の佛教信者と同じく佛様を信じて居る、それは同じであります。ただ佛を信するといふ外に、その法を護るといふところに特色がある。そこが急所である。そこからして一切の善根が生れて來るのであります。どうしたらいい功徳が受けられるか、何が功徳になるかといふことを考へて置かなければ、功徳善根といふものの積み方といふものが分らないやうでは仕方がない。功徳は佛を信じ、法を護るといふ精神、佛様に供養して善根を積む、斯ういふところにあります。

だからしていまの護法の一顧といふものは、みな心を協せて、異體同心——教育勸諭の中に『億兆心を一にし』とある、身體は億兆もあるが心は一つである、之を日蓮聖人は『異體同心』といつて、身體は違つて居つても心はみな同じで、もしいくら身體は澤山に分れてゐても、同じく護持正法につとめ、日本乃至全世界に弘むれば、一天四海皆妙法に歸せん、その皆歸妙法の春を迎へよ、と仰つた。これが法華經の法である。そして法を隆んにして、これによつて自分が救はれ、先祖も救はれ、また世の中の人を導き、國もそのために安らかになり、全世界これがために救はれるのであるからして、法を大切にしなければならぬ。これはただ佛法ばかりぢやない、國家でも同じことあります。國の忠良となり日本にあるところの實を守る、守るばかりが大事ぢやない。無論軍人は軍旗を守るためには生命を捨ててかからねばならぬのであるが、この日本に傳つて居る正しきよき教へ、日本人の有つて居る善良なる國

民生活、そこに流れて居る尊い東洋の文化、これに益々磨きをかけて、そして全世界におし弘めて行かなければなりません。ところでその國の生命となるものはやはり教へである。教へであるからして教育勸諭に於て『國を肇むること高遠に、徳を樹つること深厚なり』と仰せられて居る。國が肇まれば直ぐにそこに徳がある。道を中心に國が出来て居る。『斯の道は實に我が皇祖皇宗の遺訓にして』。『この國は』ではない、『斯の道は、實に我が皇祖皇宗の遺訓にして、子孫臣民の俱に遵守すべき所』である。それを『朕爾臣民と俱に拳々服膺して、咸其徳を一にせんことを庶幾ぶ』。これが國よりも大事である、國の法である。況んや佛法の方から申せば、教へといふものが本であるから、寺の屋根が壊はれ、壘が破れても、法はあらねばならぬ。その家が壊はれ壘が破れても法を護らんとする精神、その失つたところに佛法は滅亡となる。我がこの統一國、吾々が活躍をして居る統一國は、法を中心にして集つて居るものである。すべて法が中心であります。

あなた方の集りは、これを法朋といふ、法の友である、法の交りである。よく考へて見ると、これは最後まで一緒に行く友達であります。他の人は表面非常に仲がよいやうでも、住宅が離れて大阪長崎に行つてしまへば、それは文通位にするかも知れないが、死んだりしてしまつたことやら分らなくなる。或る人は蜘蛛になる。或る人は蛭蟪になる。『あなたが蛭蟪になつたから、私も蛭蟪になりませう』といつて行かうとすると、どつこい道が違ふ。『あなたは生きて居るときは偉いもんだつたが、善いことをしなかつたから蜘蛛になるのだ』さういふ譯で各々道が違つて來るけれども、同じ心で法を護るときは、みんな立派な佛様になつて、本佛のところへ一緒に行くことが出来る。それは護法の力によるものである。『氣の毒だけれども私はこつちに行きます、あなたはそちらへ。』夫婦でも生きて居る間は何か手を引いて行くが、死んで手を放してしまへば、護法の力といふものが行き所をきめる。どしやんと落ちれば下は地獄なんです、『亭主が行くから自分も佛様のところへ行かなければならぬ』といつたところが仕方ない。『いま助けてあげるぞ』、『まあ待つて下さい』といつたところが、その人が法を護らず、功徳善根を積まな

れば、佛の力といへども無暗に之を引出すことは出来ない。自業自得、自から之を招いた結果であるから、さう簡単に救ふといふ譯に行かない。この集まりはさう仲よくないやうに見えるけれども、みんな同じ道を行って居るから、つまりは佛の本土にまで一緒に行くところの友達であります。これが法朋である。それは少々は意見の違ふこともあらう、「お饅頭にしませう」「強飯にしませう」そして強飯説が立つて、饅頭説が倒れたからといつても、そんなことでうらめしいといふことにはならない。やはり永遠の友である。互に顔を見知り、互に同じ信仰を有つて、そして佛の所に一緒に行くのである。この世界には十七億からの人間が現在生まれて居るけれども、永遠の友はこの法朋であるといふことをお考へになつて、その精神を以つて一層みなさんの結合を強くし、互に相頼り相扶けて、立派に正法を護持するとともに、この集りの中からしてその立派な正法を發揚するといふことに考へなければならぬ。そこに眞の國家興隆が期待されるのであります。

勝鬘師子吼經、三願章、第三

爾の時に、勝鬘、復佛前に於て三大願を發す、而も是の言を作さく、此の實願を以て無量無邊の衆生を安穩し、此の善根を以て一切生に於て正法智を得ん。是を第一の大願と名く。我れ正法智を得已つて無厭心を以て衆生の爲に説かん、是を第二の大願と名く。我れ正法を攝受するに於て身命財を捨てて正法を護持せん、是を第三の大願と名く。

勝鬘佛に白して言さく、菩薩所有の恒沙の諸願は、一切皆一大願中に入らん、所謂攝受正法なり。攝受正法を眞に大願となす。佛、勝鬘を讚めたまはく、善哉々々、智慧方便甚深微妙なり。勝鬘、佛に白さく、我れ當に佛の神力を承けて、更に復攝受正法の廣大の義を演説すべし。佛言はく便ち説けと。勝鬘、佛に白して言さく、攝受正法の廣大の義とは則ち是れ無量なり。一切の佛法を得、八萬四千の法門を攝す。攝受正法は無量の福報及び無量の善根の雨をふらす。攝受正法は大衆の無量界蔵、一切菩薩の神通の力、一切世間の安穩快樂、一切世間の如意自在、及び出世間の安樂を出生す。無聞非法の衆生には、人夫の功德善根を以て之を成熟し、聲聞を求むる者には聲聞衆を授け、緣覺

を求むる者には緣覺衆を授け、大衆を求むる者には授くるに大衆を以てせん。是を攝受正法と名く。普く衆生の爲に不請の友となつて、大悲もて安慰し、衆生を哀愍して世の法母とならん。

世尊よ、法滅せんと欲する時、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、朋黨評訟して破壊離散せん、不詔曲・不欺誑・不幻偽を以て、正法を愛樂し、正法を攝受して、法朋の中に入らん。法朋の中に入る者は、必ず皆佛の授記する所とならん。世尊よ、我れ攝受正法を見るに是の如きの大力あり。佛は實眼實智たり、法の根本たり、通達法たり、正法依たり、亦悉く知見したまふ。

如是、勝鬘汝が所説の如し、我れ阿僧祇劫に於て攝受正法の功德義利を説くも邊際を得ず、是の故に勝鬘よ、攝受正法は無量無邊の功德あり。

南無妙法蓮華經

(二二頁より)

れを領解して、人にも話をする。更にその教に説いてある所の意義に基いて、自分の思想行爲が支配されて行く、自からその教のやうに働き教に導かれて、自分の活動が教と一致して起つて来る。それが自分のみならず、人にも勧めて大に行はせるやうにする、それが法を供養するといふことになるのであります。餘程よく解るやうに説いてある。

それから出家の人を供養するといふのは、是はどうするかといふこと、此處にはその經文を省略して居りますが、それには第一に出家の人を尊敬し、その教を尊んで教を聞く時には御馳走しろといふことが書いてある、油揚げばかり食はせよといふやうなことは書いてない、なかなか気が利いて居るので、相當御馳走を食はせよといふことになつて居る。法を聞くには御馳走をする、餐膳は要らぬけれども、寺の和尚だから豆腐と大根で澤山だといふのは、それは侮蔑の意が混つて居るので、敬意を掃ひ心をこめて供養せよといふことになつて居るのであります。實は是は食ひ氣ばかりではない、僧侶の活動を助けるといふ意味で、佛教の宣傳を授けて行くのが、僧を供養する根本の精神であります。

立正安國論講話

(第一講)

小林 一郎

六

今回から「立正安國論」を読むことになりました。今日はこの安國論といふものの大體の性質をお話して置きたいと存じます。これはどなたも御存じのやうに日蓮上人三十九歳の時に鎌倉幕府に出されたものであります。上人の御書の中では特に名高いものであります。この安國論といふものになる迄の一通りの順序を申して見たいと思ひます。

御存じのやうに日蓮上人は十二歳の時に清澄で出家をされました。三十二歳の四月の末に法華經を弘める爲に一生を捧げるといふことを決定された、この間二十年あります。この二十年間が日蓮上人の研究時代である。上人がどういふ艱難に遇つても屈しないといふことは、その人物が勝れて居るからであることは勿論でありますけれども、一つにはこの二十年の研究が大きな力になつて居つた。決して自分が一種の思ひ付きで法華經を弘めるといふやうなことになつたのではないので、二十年間

もう全く生命を打込んで研究をされたのであります。どうして日蓮上人が研究といふことに心を入れられたかと申しますと、上人の御出家になつた安房の清澄は今では眞言宗であります。その時分は天台宗でありました。天台宗は申す迄もなく法華經を中心とする宗旨である。併しながらその當時の天台宗は「台密」と言ひまして、「密」といふのは密教、即ち眞言の教を天台の中に取り入れて眞言と法華との混つたやうな信仰をして居つた。それは何故であるかといふと、日本に天台宗を弘めたのは傳教大師であります。傳教大師の時を同じうして弘法大師が出られた。傳教大師は叡山を根據として天台宗を弘める。それから弘法大師は京都の東寺を根據として眞言宗を弘めた。後には弘法大師は高野に退かれたのであります。これはすつと晩年であります。眞言を弘めることに専ら力を盡したのは京都を中心として居る。この傳教・弘法の二人は當時の最も勝れた人物である。それは

宗物上の信仰がしつかりして居るばかりではなく、學問と言ひ又識見と言ひ經歷と言ひマア當時の坊さんの中でこの傳教・弘法の二人の人に及ぶ者はない。併しながら年輪は傳教大師の方が七つ上でありまして、弘法大師も傳教大師には大いに譲つて傳教大師が盛んに活動して居られる頃は、餘り弘法大師は活動されなかつた。後になると宗といふものが對立して兩方敵同志のやうになるものだから、いろいろな噂が後から出て来て、どうも傳教・弘法の二人は仲が良くなかつたやうな言ひ傳へなどがあります。決してさうではなかつたやうであります。どちらも勝れた人物でありました。弘法大師は傳教大師を先輩として尊敬をして居る。さうして傳教大師が盛んに活動して居る間はワザと控へて餘り活動しなかつた。そこところは實に立派なものである。

ところが、傳教大師と弘法大師の二人は同じ年に支那に留學を致しまして、傳教大師の方は支那に在ること一年で歸られた。これは傳教大師は主に教義を研究する爲に行かれたので、支那に行つて研究をして見ると、こちらで本を讀まれた以上のものは殆どなにもないものでありますから、一年にして歸られた。尤も、桓武天皇が傳教大師を非常に御信用になつて居らつしやつたので、支那に行つても餘り永く居ないやうに、といふやうな仰せ

もありました。旁々傳教大師の方は一年で歸られた。それから弘法大師はもう一年、都合二箇年支那に居られて眞言の方の教義を出来るだけ詳しく研究して歸られたのであります。でありますから、傳教大師は年輪も上だし又學問その他に於て弘法大師以上の人だけれども、眞言の教義だけは弘法大師の方が詳しい。それで日本に歸つた後も、傳教大師は屢々弘法大師を訪問して眞言に就ての教を受けて居られるのであります。これは又實に偉いものである。自分より後輩であるし、又學問等も概して言へば自分より下なのだけれども、併し眞言のことだけは弘法大師が詳しいから、それで自分で訪ねて行つて教を受けた。弘法大師が高野山で灌頂といふ儀式をお弟子を集めてやつた時に、傳教大師も弟子としてこれに連つた。これは弘法大師がその式に列席した人の名を書いたものが今でも残つて居りまして間違ひのないものであります。その中の一番に最澄即ち傳教大師の名が書いてあります。斯ういふところは昔の人は實に偉いものであります。ちつとも我がない。道を學ぶといふ上に於ては少しも世間的の事なぞ考へて居られないのであります。弘法大師は傳教大師を尊敬して居るし、傳教大師は又弘法大師のさういふ力を認めて聞くことがあればいつでも聞くといふ態度であつたことは、後世から考へて見て實に

七

羨ましいことに思ふのであります。

さういふやうな譯で、兎に角この二人の方はお互に尊敬し合つて居つたので、後で考へるやうに敵同志ではなかつたのであります。何しろ傳教大師の方が年齢が上でありまして、日本には弘法大師以上の人物は宗教界にはない。それで眞言宗が盛んになつて來た。どうも宗教といふものは人に依るのであります。一般の人は何もさう教義を詳しく研究するなんていふ力はありはしないのでありますから、その教を弘める人が立派な人であれば、自然にその宗が盛んになるといふことは當然のことでありまして、マア弘法大師の一人舞臺のやうな状態で東寺を中心と致しましたところの眞言宗、即ち密教がだんだん盛んになつて來たのであります。

併しながら法華を中心として考へる方の思想から申せば、密教といふものは佛教の本當の流ではない。傍に偏つたものである。眞言宗を學んだだけでは佛教の本當の精神は解らぬのであるから、本當を言へば、如何に眞言宗が盛んであつても叡山を護る人はどうしても法華經を信じて、法華經だけを中心として教を立てなければならぬ。併しながら法華を中心として考へる方の思想から申せば、密教といふものは佛教の本當の流ではない。傍に偏つたものである。眞言宗を學んだだけでは佛教の本當の精神は解らぬのであるから、本當を言へば、如何に眞言宗が盛んであつても叡山を護る人はどうしても法華經を信じて、法華經だけを中心として教を立てなければならぬ。併しながら法華を中心として考へる方の思想から申せば、密教といふものは佛教の本當の流ではない。傍に偏つたものである。眞言宗を學んだだけでは佛教の本當の精神は解らぬのであるから、本當を言へば、如何に眞言宗が盛んであつても叡山を護る人はどうしても法華經を信じて、法華經だけを中心として教を立てなければならぬ。

のになつてしまふ。大日如來が非常に勝れた佛様で、大日如來といふ佛様がお釋迦様ともなれば、阿彌陀様ともなれば、有らぬ佛となつて現はれるのだから、お釋迦様といふものはさう尊敬しないでも宜いといふのが眞言宗の立場であります。それで叡山の方ではそれ程お釋迦様を低く見ない。成程大日如來が現はれたに相違ないけれども、併しこの娑婆世界、吾々の住んで居るこの世界に出た佛様としてはお釋迦様だけなんだから、娑婆世界に生れた自分達としてはやはりお釋迦様を尊敬しなければならぬ。眞言宗の方で言ふやうにそんなにお釋迦様を低く見るには及ばぬ、斯う言ふのであります。そこが違ふ。同じ密教でも大日如來を拜むことは拜がむけれども、お釋迦様に就ての考へ方が違ふ。そこが叡山の方の密教と眞言宗の方の密教との違ひであります。眞言宗の方は京都の東寺を中心と致しますから、これを「東密」と言ひまして、それに對して叡山は天台宗だから、天台宗の密教だといふのでこれを「台密」と言ふ。さういふやうに東密・台密といふ區別が立つた譯であります。台密なんと言ふことは實はをかしいことではあります。天台と密教とゴチャ／＼に混ぜたものでありますから、その當時はさういふことを言つたものであります。それで日蓮上人の御出家になりました安房の清澄もやはり台密

る。何しろ自分の寺の繁昌を圖るやうになる。これは昔から今に至るまで何時でも同じことであつて、寺の繁昌を主にすれば教といふものは第二第三になつてしまふ。叡山も傳教大師の生きて居られた頃は、桓武天皇・嵯峨天皇二代の天子様の御歸依を得まして非常に榮えて居つただけけれども、傳教大師亡き後には、弘法大師が朝廷の信用が篤く、隨つて眞言宗の方が勢力があり、叡山の方はだんだん勢力がなくなつて行くものだから、そこで叡山の坊さん達が、これはどうもいけない、自分のところを繁昌させるにはやはり眞言も信じて東寺のやうなやり方をした方が宜いといふやうに考へた。これは間違ひである。大事な信仰を動かして寺の繁昌を圖らうといふことは善くないのですが、併しマア成行がさうなつた。そこで叡山で密教、即ち眞言宗の教義を採入れて、法華經を讀むのと併せて眞言の方の大日經といふやうな經を讀む。それから本尊も眞言宗で拜がむところの大日如來といふ佛様を本尊として拜がむ。斯ういふ風になつて來た。法華でありながら眞言をやるのでありますから、餘程奇妙なものであります。併しながらその東寺の方、所謂眞言宗の方の密教とは少し違ふのであります。どう違ふかと言ふと、眞言宗の方で言ふと、お釋迦様といふものは海につまらないも

でありまして、眞言の教義を採入れて大日如來を拜がんで法華經を讀むといふやうな一種の混つた信仰であります。眞面目に考へればどうも徹底したものではありません。マアさういふ状態でありました。

それからもう一つ不思議なことは、法然上人といふ方が出てから念佛が非常に流行つた。これはもう御存じのことではあります。法然上人は高倉天皇の時、即ち平清盛が勢力を得て居た頃から念佛を弘めたのでありますから、日蓮上人の御題目をお唱へになつた時よりは凡そ九十年ばかり前になるのであります。この九十年間の念佛の勢力といふものは非常なものであります。何しろ世の中が源氏・平家の戦の争をして居る最中で心細い世の中でありまして、さういふ時代に、この世の中は夢のやうなものだから、この世を頼りにしないで後の世を頼め、この世にどんな不如意なことがあつても我慢して居て、極樂に行つて安らかに送る方が宜いといふやうなことを唱へるものでありますから、大變時代に合ふ。それで念佛が大變な勢になりました。殆ど日本全國念佛以上の勢力の有るものはないといふくらゐになつて來た。さうなると不思議なもので、何處のお寺でも葬式をする時には「南無阿彌陀佛」と言ふやうになつて來る。だから天台宗のお寺の安房の清澄でも、人のお葬ひをする時に

は「南無阿彌陀佛」と言つたらしい。それだから日蓮上人はとうも不思議に思はれた。一體これは何をして居るのだらう。天台宗であつて法華經を讀んで居りながら、本尊を見ると大日如來を祀つて居る。それで葬式をする時には「南無阿彌陀佛」と言ふ。一體何を信じて居るのか分らぬ。斯ういふ疑を起されたのは當然であります。頭の悪い人なら習慣通りやつて居れば宜いと思ふでありませうが、日蓮上人のやうな非凡な方はただ習慣でやつて居る譯には行かない。人間の信仰の中心といふものは一つでなければならぬ。法華經が中心となつて阿彌陀様も大日如來も要らない譯であります。「南無阿彌陀佛」と言つて阿彌陀様を頼むのなら法華經も何も要らない。大日如來を拜んで法華經を讀んで阿彌陀様を頼むといふことは一體譯が分らぬ。如何に習慣とは言ひながら不思議なことである。こんなことをやつて居つて自分の心が濟むものではない。自分が心に信ずることが出来ないことを人に説くことの出来るものではない。だからこれは何とかが一つ本當の佛教といふものを明にしなければならぬといふことに考が付かれたのであります。

就てはこの念佛とそれから眞言と天台ばかりでなしに、日本にはその時まで八宗が支那から傳つて居る。これは何れも奈良にそれぞれ寺がある。この八つの宗に

分れて居るのも實は不思議である。お釋迦様がお創めになつた一つの宗教がそんなに八つにも分れるといふ筈はない。又分れて居ればどれか最も勝れたものが一つあるに相違ない。そんなに皆同じ値打のものが七つも八つもあるといふ筈はないのだから、お釋迦様の本當の御心持に適つた教といふものはどれか一つでなければならぬ。八つの中のどれか一つがお釋迦様の心に適つた教であるかも知れない。或は又八つとも間違つて居て別にお釋迦様の御心持に適つた教があるかも知れない。お釋迦様がお創めになつたのだから、お釋迦様の御本意に適ふやうな信心をしなければならぬ。又もう一つは時代といふものがある。だんだん世の中が複雑になつて、所謂末の世の中になつて來ると、好い加減な教では人の信仰の中心とはならないのだから、この時代からも考へて、果してお釋迦様の御本意に適ふ教は何だ、又今の時代に合ふ教は何だか、これを知りたいといふ決心をされたのであります。それは恐らく十六歳の時に頭をお剃りになつた頃からだらうと思はれる。十二歳の時に清澄に行かれたのであります。初めは道善といふ人のところに弟子として仕へて、十六歳の時に出家をされた。その出家をされる頃から、愈々自分も僧侶となるのだから好い加減なことではいけないといふことで研究をしようといふ決心

をされた様子であります。これは自分の職分を重んずるといふ點に於て、一切の八のお手本と言はなければならぬ。教を説くといふことが僧侶の職分だから、その教を説く人が安協的に、阿彌陀様も宜からう、大日如來も宜からう、と言つて教を説くといふことは、これは己を欺くことであり人を欺くことである。さういふことの出来る譯はないといふところから、そこで研究に入られたのであります。

ところが、もう一つ日蓮上人の頭に起つた問題は、これが後に立正安國論といふものをお書きになる本になる譯であります。一體日本に佛教が始まつて以來久しく経つけれども、なぜ佛教が日本に、朝廷のお力も加はつて盛んになつて行くかと言へば、佛教が弘まれば國が榮えて行く筈だ。朝廷に於て佛教を御保護になつたのは専らそれでありませう。人間の心が正しくなつて國が榮えて行く爲には佛様の教を弘めることが大事だといふことで、朝廷の御保護その他藤原とかいふやうな有力な家の力添へもありまして佛教が盛んになつた。ところが當時の日本を見ると、國は決して幸福でない、國の全體から言つても天子様が御自分で政治をお執りになるのではなくして、武家が政治を執る。その武家も陪臣の北條が政治を執るといふやうな前後に類の無い状態である。それ

から又地震も折々ある、洪水もある、饑饉もあるといふやうな譯で、國民の生活も甚だ安樂でない。これではどうも佛教の弘まつた甲斐はない。佛教の弘まつて居る國は安泰でなければならぬ、國民が幸福でなければならぬのに、日本の國は少しも幸福ではない。これは今の佛教が間違つて居るのではないか。何か筋道の違つた信仰をして居るので佛教もこの國を護らず神もこの國を護つて下さらないのであらうといふやうな疑ひも起きた。この問題も解決したい。語り言ふと、お釋迦様の御本意に適つた佛教は何だらうか、日本の國を安んずるだけの力の有る教法は何だらうか、斯ういふ二つの大きな問題が起きて來た譯であります。この二つの問題を研究しないといふ加減にして僧侶となることは自分の心が許さぬといふので、十六歳の頃から三十二歳までの随分永い間でありませうが、彼此れ十六年間といふものは全精神を研究に打込まれた。だからその研究をする時にはもう天台宗の僧侶といふ立場を捨てて居られる。そこは考へなければならぬ。自分は清澄で出家をしたから天台宗の僧だ、といふやうなことに引掛つて居つては本當の研究は出来なから、研究をするにはもう何宗もすつかり捨ててしまつて初めからやり直す。全く今言ふ白紙の状態になつて三十二歳まで研究をされたのであります。今その研究

の細かいことは申しませぬが、鎌倉にも行き、それから主に叡山に居られました。大阪の天王寺にも行けば近江の三井寺にも行けば高野山にも登る、當時の有ゆる方法を執つて研究を続けられた。何しろ今と違ひまして御經といふものはさう澤山ありませぬから、御經を讀むことが難かしい。そこで大阪の天王寺とか三井寺とか京都の泉涌寺といふお寺、これも大變經が澤山あるといふのでさういふ所にも行きまして御經を讀まれた。それから又有名な學者と聞けば必ずその學者の門を叩いてその教を受けるといふやうなことで三十二歳までを暮された。それで三十二歳の時初めて法華經がお釋迦様の本當に魂を打込まれた教である、國を護るべき教はこれより他にないといふことに考が決つた。

これは前にもお話をしたと思ふが、問題が二つある。即ちお釋迦様の御本意に違つた佛教は何だ、それから日本の國を護るべき教法は何だといふ、問題が二つある。この二つの問題を研究してこの答が若し別に出たら大變だ。譬へばお釋迦様の御本意に適ふ教は法華經で、日本の國を護る教は阿彌陀經だとか何とかいふやうに答が二つ出たら大變だ。又この二つの答をもう一度測める爲に考へなければならぬから、これは大變なことになる。併し初めからそんなに二つ出たら大變だと思つて居られな

る人が現はれなければならぬといふことであります。末法の世といふことは數字で佛滅後何千年といふことばかりではない、世相、この世の相であります。これが一番大事な問題です。末法の世は阿彌陀經の世と言ひ白法隱没の世と言ふ。お釋迦様は斯ういふことを末法の特徴としてはつきり言つて居らつしやる。「阿彌陀經」といふのは人々が皆争に依つて萬事を解決する。人に譲るなんといふことをしないで、力づく腕づくで争をやつて勝つた者が勢力を持つといふ時代、それが阿彌陀經の時代であります。それから「白法隱没」といふのは、正しい教が世の中に隠れてしまつて皆が勝手次第なことをやつて居る時代、これが末法の世の特徴だ、日蓮上人が考へて見ると、丁度その時分がさうであります。源氏平家の争があるし、又支那の争を聞いても、南北に分れて居つたのがだんだん南の方の隋に依つて他のものが攻め潰されて行くといふやうに、皆力の有るものが勝つといふ有様である。朝鮮は支那の力に押されてだんだんと獨立を失つて行くやうな状態である。どうしてもこれは阿彌陀經の世の中に違ひない。斯ういふ時代にこそ法華經が弘まるべきである。法華經の中には、末法の世にこの法華經が弘まる。その弘まるのに、昔お釋迦様が法華經をお説きになつた時に佛前に現はれて、必ず末の世に出てこの經

いから、何がお釋迦様の御本意に適ふか、何が日本の國を護る教だらうといふことを一心に研究された。さうするとその研究の結果はお釋迦様の本當に魂を打込まれたものは法華經だ、さうして又法華經は「娑婆即寂光土」と言つて、極樂淨土を西にも東にも求めるには及ばない。皆が法華經の信仰を勵んで行きさへすれば、この娑婆世界が極樂淨土と同じになれるのだといふ教なんだから、これで行けば日本の國も安泰になるに違ひない。答が二つにならないで一つになつた。お釋迦様の御本意に適ふものは法華經だ、日本の國を安泰ならしめるものは法華經だ。これはなにも無理に一つにしようと思つた譯ではない。研究の結果、法華經といふもの一つでこの二つの問題はすつかり片が付いた。それだから日蓮上人は非常に喜んだ。これは實にどうも不思議なことだ。もうこれだけ、初め清澄に行つてから二十年間の研究がだんだん進んで行つて、法華經を信じさへすればお釋迦様の御本意にも適ふし、又皆法華經を信じさへすれば極樂淨土になつて日本の國も安泰になることが明になつた以上は、法華經より外に今の世の信仰の中心となるべきものはない。斯ういふことに決心が付いた。

ところが、さう気が付いてから法華經をもう一遍讀んで見ると、末法の世、末の世になればこの法華經を弘めを弘めませう、といふ誓ひを立てた菩薩達が先づ生れて來てこの經を弘めるに違ひない。斯ういふことが信ぜられる。誰かさういふ人が出さうなものである。日本の國にも誰かさういふ人が出なければならぬ。斯う考へられ分がこの法華經を弘めて一つの宗を開かうなんといふ考は初めはちつともない。誰か出れば宜しい。誰か出さへすれば自分ももうその人の後に隨つて行つても宜しい。斯ういふ考で、誰かこの末法の世の中の相の現はれた今世の中に出て法華經を弘める爲に力を盡しさうなものだ、誰か出るだらうと思つて當時の世の中の様子を能く觀て居られた。どうしてもこれは叡山から出なければならぬ。叡山は傳教大師の開かれた山であつて、法華經の中心地だから叡山から出なければならぬ。ところが叡山を見ると、叡山は前に言つたやうに台密になつてしまつて、眞言宗の教義を説いて大日如來を拜んで居るのだから、命に懸けて法華經を弘める人が現はれやうとも見えない。さうすればどうするのだ。そこで日蓮上人は暫くは途方に暮れられた。その事を御自分で言つて居られます。どうもお釋迦様が嘘を吐いたのではないかしら。お釋迦様は末の世になつたら必ず法華經が弘まると仰しやつて居るのだけれども、もう末の世の相がありありと眼

の前に現はれて居るのに法華經を弘める人が出て来ないのだから、して見ればお釋迦様の仰しやつたことは嘘になる。お釋迦様が嘘を吐かれるやうなら法華經といふものはまるで信用がなくなつてしまふ。一體どうしたものだらうといふので暫く迷つて居られた。そこでいろいろ迷つた學句に到頭一つの決心が付いたのは、お釋迦様が嘘を吐くか吐かないかなどとさういふことを暢氣に考へて居る時ではない。今日日本で法華經が一番勝れた教だといふことに氣の附いた者は、恐らく自分一人だ。自分がここで奮發して法華經を弘めて、まあ初めは急に弘まらなくても永い間に法華經が弘まつて来れば、お釋迦様の仰しやつたことが中るので。即ちお釋迦様は嘘吐きにならないで済むのだ。若しここで自分が奮發しないで法華經が何時までも弘まらないで居れば、お釋迦様は嘘吐きになる。だからお釋迦様が嘘を吐いたか吐かないかなんといふことを考へないで、お釋迦様を嘘吐きにするかしないか、これは自分の考へ方一つだ、その責任は全く自分にあるといふことに氣が附かれたのであります。これは實に偉い事であり、人に任して置くことではない。自分が法華經より外ないと決定した以上は、その法華經を弘めることが自分の當然の責任でなければならぬ。自分が若しこの責任を怠つて置いて法華經が弘まら

ずに終るならば、お釋迦様は嘘吐きになつてしまふだらうし、又自分も折角二十年間研究をした甲斐はない。この法華經を弘める爲に起たう、斯ういふ決心をした。

併しながらお經を讀んで見ると、お經の中には法華經を弘める者にはいろいろな迫害が集まると書いてある。或は笑はれ或は誘はれ或は刀で斬られる或は石を投げ付けられる、杖で打たれる、自分の住む所を逐はれる、といふやうなことが書いてあるのだから、その有らゆる迫害に耐へられるだけの力がなければ、法華經を弘める爲に起つたところが無駄である。果して自分にそれだけの事が出来るだらうかと又考へた。何しろ日蓮上人といふ方は用意周到な方でありますからさう考へた。出来るだらうか、出来ないくらゐなら止める方が宜い。途中で腰が抜けるくらゐなら止める方が宜い。果して自分に出来るものだらうかと考へた。そこで若し出来ないならばそれまでの話だが、兎に角やらなければいけない。お經の中に迫害が集まると書いてあるのだから、法華經を弘める爲に自分が命懸けでやつて見よう。さうして迫害が来たら自分が法華經を弘める資格の有る者だといふことがはつきり判る。お經の中には法華經を弘める人には害が集まると書いてあるのだから、それが自分の身に實現したら自分はその資格が有る譯である。若し法華經を弘めて

も害が来なければ、お經に書いてあることと違ふのだから自分はその人ではない、つまらぬ者になつてしまふ。どうだらう一つやつて見よう、兎にも角にも有ゆる迫害を覺悟して果して自分が法華經を末の世に弘めるだけの資格が有るか、その力が有るかどうかといふことを試みる外ない。やらすに何時まで考へて居ても仕方がない。身を以て試みよう、斯ういふことを決心されたのであります。

さうして三十二歳の春に叡山を下つて故郷の安房に歸られた。それだから華やかなことを言ふと、四月の二十八日の明方に安房の清澄の山の上で東の方にさし昇る旭を拜んで初めて題目を唱へられたといふ、非常に華やかな場面があるが、その時初めて法華經の行者として起つたのではない。叡山を下りて来る時に、有ゆる迫害を忍んで法華經を弘めるといふ大決心を胸に懐いて下りて來られた。だから私は叡山の坂を下りて來られる日蓮上人のお姿といふものは非常に尊いと思ふ。あの時もう一切決つて居る。清澄に來て急に法華經の行者になられた譯では決してない。世間は華やかな事が好きだから、日蓮上人の旭の森といふことを繪にも描きますが、私は若し上手な繪を描く人があつたら叡山を下りて來られる時を描いて貰ふ。あの時に將來の事をすつかり胸に疊んで叡

山を下りて來られたのであります。僅に三十二歳でありますけれども、もう本當に日本の國に法華經を弘める責任を一身に負ふといふ考で叡山を下りて來られ、さうして故郷の安房に歸られた。

なぜ安房に歸つて教を弘めたか。こんなことをするのは損得を言へば損であります。耶穌も言ふやうに、豫言者は故郷に容れられず、自分の故郷では子供の時から的事を知つて居るからなかなか人が信用しない。幾ら偉い事を言つても子供の時の事を言はれると、どうも甚だ工合が悪い。だから知らない所で教を弘める方が大變都合が好い。故郷は本當はどうもいけない。吾々などはまあ疎な者ではないけれども、それでも子供の時の事を知つて居る人に會つたら叶はない。お前は子供の時にお汁粉を食べたいと言つて泣いたさうだ……などと言はれると天下國家もなにもなくなつてしまふ。洵に子供の時の事を言はれると困るものであります。だから日蓮上人も若し教を弘めるのに都合の好いことを考へたら故郷の安房に歸らないで、違つた所に行つて教を説き始められた方が有利であるに相違ない。そんな厄介な事をしない方が宜い。併しながら佛教に於ては恩といふことを言ふ。天地の恩、親の恩、國の恩、師匠の恩といふことを忘れてはならぬ。(次號)

本佛實在の宗教哲學 (廿五)

一六

河 合 陟 明

十七、統覺における實相の多面性 (承前)

然るに根本無明を徹底斷破して、普遍法界の眞如の「如理智」を顯現し、從つてその無限大の意識面に映じきたる無明界中の妄想夢裡の九界萬有たる一切衆生をも徹底的に照破して、その煩惱と佛性の裡に纏結しつゝ、或は墮落し或は向上するところの、千態萬様の「如量智」をも獲得したる、大覺者佛陀にあつては、或は寧ろ超個人的一普遍の本質たる法性そのものの極みなき深みを有する立體的無限の内包量を、個體人格化的に無限に限定しゆく佛性向覺としての如量智の極限に於て、全くそれを無限大の平面化し、量の極限を再び質化し、しかも高次的に質化し、即ち如量智を完結して一大直觀的如理智化し、即ち法性の濃度の極限密度たる佛智の般若波羅蜜、或は即ち法性量の人格的飽和度に達したる佛智の般若波羅蜜は、かの立體的なる深度をまた實に再び無限大の平面と化し去り、たゞ是々たるますみの鏡となつてゐるのであつて、かくてこの立場においては、翻つて自己以外の一切衆生が、(自己は既に經歷し來れるが如く)その法性無限の内包量を萬差無限に限定して、無限の如量智を創造し現出しつゝある有様をも、この如理智的平面鏡の無限大の面に照し浮べることが出来る。即ち實智も權智も共に束ねてその諸法の實相を究盡するところの佛陀にあつては、この統覺作用が、吾々とは異つて、然りその差、須彌芥子も管ならすして、その範圍或は外延としての量的には全法界に對して行はれ、その總相別相を共に認識するのみならず、また質的・内包的には、即ちその認識對象たる萬有諸法の個々存在としての限界構成の内面的狀態について、まづ全法界の現實的様相たる迷悟十界といふ異質的世界を一舉に統覺するのであり、しかもその一々の法界において又無限に多元的なる獨立人格の、存在と因

果と意識狀態といふ又無限に異質的なる個體的歴史と、さらにその社會的狀態と自然界的國土との、總てにわたつて、換言すれば五陰世間と衆生世間と國土世間といふ三世間にわたつて、しかもそれが十界といふ善惡・苦樂・權實・眞妄といふ多面にわたつての、リーマン空間的十重無盡の重なりが、すべてそれを内面的に貫通するところの一絕對的普遍的超限界面に於て、如實に認識せられるのである。從つてそれに對する交渉活動もまた自在無碍に行はれるのである。

換言すれば、萬有個々の存在の共通の場所たる眞如法性といふ先驗的・原理的なる覺自體が、佛陀にあつてはまさしく經驗的自覺完成の現實的覺自體となつてゐるのであり、然り、原理的なるものが現實的なるものとなつたが故に佛陀と稱するのであり、從つてこゝにおいては覺自體が正に佛自體となつたのであり、如來藏・中實理心が如來となり中實事心となり、一心眞如が極果の佛心となり、即ち無作の覺自體が果上の絕對智となり、人格的存在における有始ではあるが全能なる全智者となつたのである。之に對し、吾々の働きは僅かに統覺の微分たるに過ぎない。無限小 Infinitesimal たるに過ぎない。摩訶止觀にはゆる如是四句、求三心生不可得、執心即薄、不起三性實、但有三名字、名字之生、生則非生、是字不在、内外中間、亦不常自有、是字無所有、求三性不可得、世諦破三性、是名三性空、求三性不可得、眞諦破三性、是名三性相空、復次此性相中、求三陰入界不可得、即是法空、性相中、求三人我知見不可得、名三衆生空、乃至作三十八空、云云といふ、一空萬假の統覺作用も、因位たる菩薩行の向覺の間は、實踐的意味に重心が置かれるのであつて、いはゆる空・無相・無作の三三昧ともなるのであるが、この解説を徹底したる佛果菩提に至つては、始めて鮮かなる認識論的意味を發揮し、いはゆる菩薩有行、見不了了、諸佛以不行故、見則了了となるに至るのである。かくして眞の統覺の名と實は、ひとり佛陀のみの占むべきところであるのである。

十八、個佛の統覺における有始と無始との統一

以上において佛陀の統覺の *unit-jana* 根據問題を求めて、それは法性の性德三諦の理に存することを知つたのである。確かに妙樂が摩訶止觀輔行傳弘決に一念三千といふ周備せる實在體系構成の組織的原理を論じていへるが如く、不約二十界、收事不遍、不約三諦、攝理不周、それは肯綮に中れるの言である。而してこの範圍においては天台

の佛陀論が妥當するのであつて、この意味において止觀の因行より佛果の菩提に至る、予のいはゆる佛性向覺より佛陀統覺に至る、一脈の因果的發展を論じ來つたのである。然しながらその統覺は主として空間的普遍の範疇におけるものであつて、此において、否むしる此より先に進まんとする所に至つて、つひに吾々は天台と扶を分ちゆかねばならぬ。何となれば天台の佛陀論は、その實在性において個佛の有始にとどまり、その認識においてもまた、もし之を與へていはば、苟くも佛陀の絕對智としては其がまさしく絕對智といはれ根本智といはるる如く、古今を超越し遠近を包容して、いはゆる超時空的かつ包時空的なる横廣深奥の、三十五方に遍き時空無限の認識を論ずるのではあるが、しかしもし之を奪つていはば、否むしる嚴密なる認識論上より之を批判するならば、彼れの佛智論・佛果菩提論は、そのノエマ的完全性はもとよりそのノエシスの完全性においても亦つひに有始の限界を突き破つてゐない、時の制約を超越してゐない。否願つて、認識が有始にとどまるがゆゑに、實在においてもまた有始にとどまり、無始の根本、すなはち實在の眞の實在性を認識することができぬ、眞の實在を知ることができぬ、竟に本無今有の戲論に墮するを免れないのである。之に反し、法華本門の佛陀論、すなはち眞の「佛陀の實在」と「佛陀の認識」とは、いかなる方面よりするも無始の根本を極むるものでなければならぬ。それはまづ個佛の認識において、時の全體系を盡し、存在の全様相を知るものでなければならぬ。その全様相といふも、空間的普遍の全體性のみならず、特に時間的無始の根本實在性を *batana* 高調し、それを必須の制約とし、それについて更に價值的見地より考察したる *gund taob* 事實問題として、ノエシスのとノエマ的の二面を一舉にして完璧ならしむべき所以の根據と内容を明かにし、據つて以てそれこそ眞の全體性であり完全性であることを指示するものでなければならぬ。

しかしかく時の全體系を盡し、存在の全様相を知るといふことは、いかなる意味であるか、又いかにして可能なのであるか。いふまでもなく明かに、それは實に宇宙法界の無始無終を知るといふことでなければならぬ。無終は未來であるとして、過去無限なる無始を盡すことでなければならぬ。無始を盡すには實に無始に滿らねばならぬ。それは過去に滿源して、その無限なる時の系列を窮め盡すことでなければならぬ、否その過去無限にして無始なる系列をも尙ほ超えて、これを内に包むものでなければならぬ、時の全體を包むには時を超えて時の外に立ち、時の根柢たる無限大の平面ともいふべき「場所」に出で來らねばならぬ。宛かも一次元の軸上においては時は跡方もなく消えゆくも、

二次元上においては時は常に現在でなければならぬ。それは所謂「永遠の今」或は「永遠に今」なることの意味が、單に吾々の如き人間の知識、いはゆる有限的理性の認識や直観や體驗とは異り、眞にその充實せる意味において全く妥當するものといふべきである。しかしそこに於てもその時の全體系の始と終は、固より一に結びつくものでない。もしかくなるならば時間は全く空間となるの外はない。之に反し、人格的智性の、特にその人格といひ智性といふところの意味内容がその價值的充實の極限に達したるものとして絕對なる、佛果菩提といふ二次元あるひは多次元的なる形而上的・敘智的空間ともいふべき統覺的意識の *taid* 視野において、無限なる時の歴史的系列は、あくまでも條然としてその秩序を維持するのである。眞如の理的超時間性、否従つてその全顯現たる佛智の事的超時間性こそは、法界の「絕對歴史」的全時間性を歴然として映すところの明鏡である。而してその時に於てあり、時そのものの内容たる、否時の形式を以て現るる所の、萬有の存在及び運動は、先にもいつた如く、ニュートンのいはゆる *universal gravitation* 萬有引力といふ如き自然的・力學的なる物理現象にせよ、或はライブニッツのいはゆる微分的・瞬間的意識より有せざる物質現象にせよ、或は本能と衝動に従つて行動する有機的なる生命現象にせよ、はたまた所謂 *intention* 或は *Intellekt* 智性を以て行動し、従つて目的を設定して行爲し、かつベルグソンのいふ如く記憶が自己自身を維持し、カントのいふ如く *verünftige Wesen* 理性的存在者としての道徳的態度と歴史的連續を保つところの、人格的・意志的なる精神現象にせよ、凡てそれらは悉く、知るといふ相の無限の様相 *modus* であり、本有實在の根本性格たる覺自體なるもの、所謂理本覺といふ本體論的かつ先驗原理的に絕對一元的なるもの、無量無種なる不覺的及び自覺的、はたまた無明的及び破無明的、千種萬様の限定相なのであるから、今やその覺自體そのものの全顯現たる、即ちその完全限定たり、限定完了たり、而して限定超越者たる、然り限定の極限に達してその限定作用そのものを超越したる、従つて知るといふ相の *perfect mood* 完全様態たる、従つて在る(有る)といふ相の亦 *perfect modus* 完全様態たる、否むしるそれは即ち、本來知るといふ相に於てある *substantia* 實體・本體そのものの、現實的 *perfect form* 完全形・完成形たる、ところのもの、従つてこれ即ち本體の完全顯現として正にいわゆる絕對の大覺者と呼ばるるところの佛陀なるものの絕對智は、これらの、自己に對して總て他者なるところの、否、自己自身の過去をも含めての、その凡て無始以來の實在の全歴史を、*Zueholution* 追體験に於てではあるが、全く認識し、全く

obhava 記憶し、否むしる想起し、否さらにヘーゲル的にいわゆる——但し彼れの意味を轉用し深化し開顯して——
 Eel-Innorn 内面化し、即ちこれらの一切を悉く自己自身の内面・己心の内面すなはち佛智の一念中に包攝し把握し
 わゆる統覺して、據つて以て總てそれらを「全く知る」といふところのものでなければならぬ。いわゆる一容萬
 の統覺作用が、歴史の大過去に對しても、然り全法界の無限の經歷に對しても、亦まさしく爲され得るものでな
 ばならぬ。それは常に空間的に普遍安當の認識をなすのみならず、時間的にも亦同じく、從つて未來はいふまでもな
 く、過去無限の歴史に對しても、否この無限の歴史に對してこそ、この普遍安當の認識をなすものでなければならぬ。
 換言すれば、もしこれを無限といふ概念によつて表すならば、宇宙における十法界の全體の多元的無限の存在者の、
 無始以來の、即ち眞に無限にして盡くるところなき過去及び現在のすべてに亘り、從つて時間及び空間の無限に亘れ
 るところの全現象を、さらに換言して之を本體論的プラス宇宙論的にいへば、すなはち無作本有なる覺自體の特殊
 個々無限の限定相の全體を、從つていわゆる萬有縁起として事の十界互具なる Phenomena 現象界の全體、はたまた
 いわゆる法界歴史として十界事常なる歴史的世界の全體を、その一絕對的普遍根柢たる、即ちいわゆる younava 本
 體としての覺自體そのものの、無作に本有する先驗的本質内容として、理具性徳三千といふ無限の質量たり、内包量
 たり、濃度たり、密度たり、飽和度たる、無盡蔵の奥底と共に、かくて之を一括していはば、眞の無限概念における
 事理・體象・迷悟・權實・身土・色心・内外・人法等、遍滿法界の一切の無限を、悉く「覺る」もの、「覺する」もの、
 知り盡し、見盡し、照し盡し、もつて即ち全法界に對する受用證得亦無盡なるところのものでこそ、これ眞に始めて佛
 陀といひ覺者といふ名に價するところのものでなければならぬ。如理としての眞如といひ、如智として又は如理智と
 しての佛陀といひ、或は法如々境たる法性にせよ、法如々智たる覺者にせよ、時間と空間との二方向に亘つて、その
 時間といふも特に過去無限なる無始を極むる意味において、境消無量なるが故に智水亦無盡なるものでなければなら
 ぬ、そこに於て始めて「實在の根源を知る」といふことができるのである。

南無妙法蓮華經

昭和十八年 大詔奉戴日

優婆塞戒經要解 (其十)

本 多 日 生

供養三寶品第十七

已に優婆塞戒を受けて復當に云何にしてか三寶を供養すべき。善男子よ、世間の福田に凡そ三種あり、一は報恩田、二は功德田、三は貧窮田なり。報恩田とは所謂父母、師長、和上なり。功德田とは煖法を得てより乃至阿耨多羅三藐三菩提を得たるものなり。貧窮田とは一切の窮苦困厄の人なり。如來は即是れ一切法藏なり、是の故に智者應當に至心に勤心に生身、滅身、形像、塔廟を供養すべし、若し空野無塔像の處に於ても常に當に繫念し尊重讚歎すべし。若し能く十二部經を供養すれば法を供養すと名く、云何してか十二部經を供養せん、若し能く至心に信樂し、受持し、讀誦し、解説して如說に行じ、既に自ら爲し已つて復人を勤めて行ぜしめよ、是を十二部經を供養すと名く。若し出家の人を供養せば是を僧を供養すと名く。

このお經の順序は實によく出來て居るので、佛を信する信仰を説きましたから、その信仰の内容を説くが爲に、三寶に供養するといふ事が出て居ります。吾々が三寶を供養するといふ事はどういふ意味であるか、又その方法は如何にするかといふ事を説きまして、佛様が在世の時には直接釋尊に向ふけれども、入滅せられた後に於ては、その釋尊

の説かれた經典、或は佛像其等に向つて三寶に供養する精神が成立つといふ、滅後に三寶を供養することを説いたものであります。且つこの中には三寶に供養する所の意義を報恩田といふ意味で能く現はして居るのであります。優婆塞が戒を受けたならば必ず三寶に供養しなければならぬ、是は佛教徒の通則である。必ず佛教徒は佛法僧の三つと、元來世の中に於て功德の得られる事に三つの種類がある、之を佛教では福田と云つて居りますが、福田といふのは、その事を田に譬へたのである、即ち斯の如き行爲は田に種を蒔くが如きもので、その結果が實つて來るといふので、福田の譬を取つてあります。この福田を分けると三つになる。「一は報恩田、二は功德田、三は貧窮田なり」是はいづれも功德になるのであつて、恩を受けて父母、師匠に報するのが報恩田であるし、功德田といふのは、自分が恩を受けなければならない、佛教の聖者、即ち善知識たるものは、それに依つて自分の功德を増長して行くのであるから、それで功德田である。貧窮田といふものは、世の中の救済すべき人に對して慈善の行爲をするのである。此方から與へるのであるが、その與へた爲に功德が得られるのである。

佛様はどういふ意味に於て有難いかといへば、一切の法の蔵であるからである。今では經藏といつて別に蔵が建つて居るけれども、元來釋迦如來それ自身が蔵である。釋尊の法藏よりして一切經が現はれて來たのである、故に一生懸命になつて生ける佛、入滅せる佛、又その佛像或は塔廟に對して佛恩を感謝する信仰を勵んで行かなければならぬ。自分が若し曠野を行くやうな場合、寺もなく佛像もないといふ場合にも、必ず目の前に寺がなければならぬ、木像がなければならぬといふのではない、心をその佛に繋けて瞑目して大恩を念ひ起して、それに對して信仰をして行くことを教へられて居る、實によく説かれてある。

法に對する場合には「十二部經」即ち一切經であります。その供養といふことは、どういふことであるかといふと、法に供養するといふのは、お經を置いて其の前に果物を供へたりするといふことではない、それはお經と果物とが雜居したといふだけで、お經は果物を食はうといふのでないから、それで法に供養したとは云へない。世間では是が非常に誤解されて居る。それは一生懸命に釋尊の教を信じて、「榮」といふのは、自分は佛徒であるといふことに就て洵に有難いことであると悦ぶことである。而して教をよく覚えて、それを讀み、又そ

(五頁へつゞく)

記事

本部 團報

聖典講座 毎土曜日午後二時より三時まで、小林先生の法華經如來壽量品に對する九無上の有難い講話が續けられた。此の學國緊要の禱り、國民の人格を崇高ならしめることが最も肝要なことは今更贅言を要しない。顧みて互人は何の爲に生れたのか、生死の問題をどう見るべきか。これが正解されるには何としても迷妄の我等の淺識に據るべきでなく、聖者の明教を仰がねばなるまい。篤敬三寶の實踐に到らずしては、お互眞の幸福は望めないであらう。幸福といつても世間で考へるやうな功利的な浮雲のやうなものを指すのではない、眞の幸福とは永久に滅びないものをいふのである。それが知りたければ本部の例會に参加するが一番徑である。

信行會 毎月曜日朝六時から二時間近く、御寶前に於て眞實な練成が不斷に行はれてゐる。近頃は佛敎を知らずして徒らに誦する神官や博士共が、新聞紙上に戯論してゐることは、お國の爲にも、大東亞の爲にも憚すべきことである。殊に又在來の日蓮主義名士であるとか、管長が大僧正だといふやうな人達が観音信仰で大東亞諸民族を精神的に結合しやうとする會を發起したり、又木劍を振廻して世間を騒がせんとするが如きは、全

く師子身中の蟲である。由學阿世の體俗激増せんとする今日毅然として法統を死守するは、本國の光榮とする處である。愛國護法の士女は結束を堅くして、不情身命の勇精を致すべき時である。北や南の第一線に健闘せる我等同胞に何を以て報ひんとするか。勇士の叫喚頻々と耳朶に徹するでないか。奮へ同志よ信仰報國を!

其他 八日の大詔奉戴記念、同師會及び婦人會のことは紙面の都合により割愛させて頂く。

福島支部報

六月十四日(月) 午後三時彌部先生をお迎し、縁邊い芝生を前にして如容莊で例會を催す。お勤めの後豫て五味君よりの要請に依り「死」の問題に就て懇切の法話あり、生死解説の道は我等でも十界互具の妙體であるから、佛既に常住なれば我等も亦不滅のものたるを思ひ、不斷の正しき信仰に依り佛性を開發し遂には營業我淨の佛身を成ずるものだといふことを諒解した。法話後活潑な質問あり、一段と奮起せねば相成らぬ次第と痛感した。

同日夜 大町中村線宅で支部例會を催す。「法藏下の信仰」と題し、法話あり。佛敎だけでは人々の満足は與へられない。茲に信仰の妙法がある。調和の教へたる法華經の信仰は心に法悦を生じ、そこから進んで善いことをする道義的感情が湧き、既にして人生の苦は打消されて了ふのである。誰でも靜かに御寶前に正座し反省懺悔することを知つてゐる人は新たな力と喜びが自づと湧き出づることを経験してゐる。立正安國首歸妙法の佛國土建設はこれ等の人々に依りて始められなければならない。(五月廿四日の教報は紙面の都合で省略)

團費誌料維持費及寄附金領收 (自五月廿一日 至六月廿一日)

一金	貳圓貳拾錢也	東京	十文字こと殿
一金	五圓也	同	藤田芳枝殿
一金	五圓也	同	平井謙殿
一金	貳圓五拾錢也	同	三澤沖江殿
一金	五圓也	同	大久保久市殿
一金	四圓四拾錢也	同	松井道安殿
一金	貳圓五拾錢也	同	小島洗明殿
一金	拾五圓也	同	龜太郎殿
一金	七圓也	同	林宇吉殿
一金	參拾圓也	同	松浦サメ殿
一金	參拾圓也	同	久保豊四郎殿
一金	貳圓也	同	丹生健太郎殿
一金	參圓也	同	花鳥喜三郎殿
一金	參圓也	同	戸村東陽殿
一金	貳圓也	同	野口佐一殿
一金	貳拾圓也	同	日本生命保險會社殿
一金	貳圓五拾錢也	同	名古屋 牛田共保殿
一金	貳圓貳拾錢也	同	兵庫縣 笠倉鹿太郎殿
一金	貳圓五拾錢也	同	長野縣 小山貞一殿
一金	六圓也	東京	中村信子殿

一金	參圓也	東京	米倉壽太郎殿
一金	拾圓也	同	沼部彌太郎殿
一金	貳圓五拾錢也	同	深澤紀文殿
一金	貳圓貳拾錢也	同	平本幸司殿
一金	拾圓也	同	俵應照殿
一金	五圓也	同	内倉治吉殿
一金	貳圓五拾錢也	同	甘樂清吉殿
一金	貳圓貳拾錢也	同	水也田吞洲殿
一金	貳圓貳拾錢也	同	高野口 乾涼甫殿
一金	五圓也	同	横濱 和田千造殿
一金	貳圓五拾錢也	同	愛知縣 青柳榮一殿
一金	貳圓貳拾錢也	同	愛知縣 後藤治二殿
一金	貳圓貳拾錢也	同	愛知縣 八木左一殿
一金	貳圓貳拾錢也	同	静岡縣 桑原敏有殿
一金	參圓也	東京	伊藤なほ殿

財團法人統一團會計

感謝
昨年病逝された榎本正氏愛蔵の本多上人著書大蔵經要義法華經講義等二十七冊を、まさ子夫人より御寄贈下さいました。爾今有志の團費に供することも出来て有難い事に在り深く感謝の意を表します。

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改訂特價	金壹圓九拾錢
法華經要義	題天覽	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓	同	金壹圓五拾錢
日蓮主義精要	同	金參圓
法華經要品	同	金五拾錢
本尊意識に就て	同	金貳拾錢
法華經の心髓	同	金壹圓五拾錢
黎明の原理	同	金五圓

佛敎の心髓	同	金壹圓七拾錢
勸行作法	同	金拾錢
本多日生上人	同	金壹圓

河合妙明著
皇道と日蓮主義
定價 金壹圓

東京市小石川區音羽町六ノ十七
財團法人
統一團出版部
振替東京九四二〇番

統一團 定價一統
一冊 金貳拾錢 送料壹錢
半ヶ年 金壹圓貳拾錢 送料共
一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

昭和十八年六月二十七日印刷本
昭和十八年七月一日發行
(第五百八十號)
東京市小石川區音羽町六ノ十七
發行所 財團法人統一團
東京市四谷區內藤町一
印刷人 山田英二
東京市小石川區音羽町八ノ十一
印刷所 野島好文堂印刷所
東京二〇五二

發行所 財團法人統一團
東京市小石川區音羽町六ノ十七
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番
配給元 日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二丁目九番地

統

一

明治三十八年十二月二十七日
明治三十八年七月一日發行
第三號
郵政特准掛號
認爲新聞紙類
每冊一圓二日發行

第五百八十號

第四十八年 七月號